

長篇ポリティカルフィクション

暗黒潮流

黒木曜之助

「文華新書」刊行のことば

新しい宇宙時代に生きる現代人は、今日に強く、さらに明日に逞しく生きるために、どんなまでもに文化教養の指針を求めています。

この新書は、激動と混乱の世代に知識を整理し、新しい法則を追求し、美と愛、生と死、結婚と性などについて、尊い価値を創造し、生活を豊かにすることを願ひ刊行するものであります。そして、今日と明日への教養と実益を探究するものと、興趣のつきない読物とを、シリーズとして、文化の華を開かせたいと念願します。

なお「文華新書」の内容、造本など既刊のもの及び今後の刊行について、ご意見などお寄せ下されば幸甚です。

暗黒潮流

0293-002870-6009

© 著者 黒木 曜之助
発行者 大 島 敬 司
印刷所 飯島印刷株式会社

著者との
諒解により
検印廃止

発行所 東京都千代田区丸の内 2-4-1 丸ビル783区 株式 日本文華社

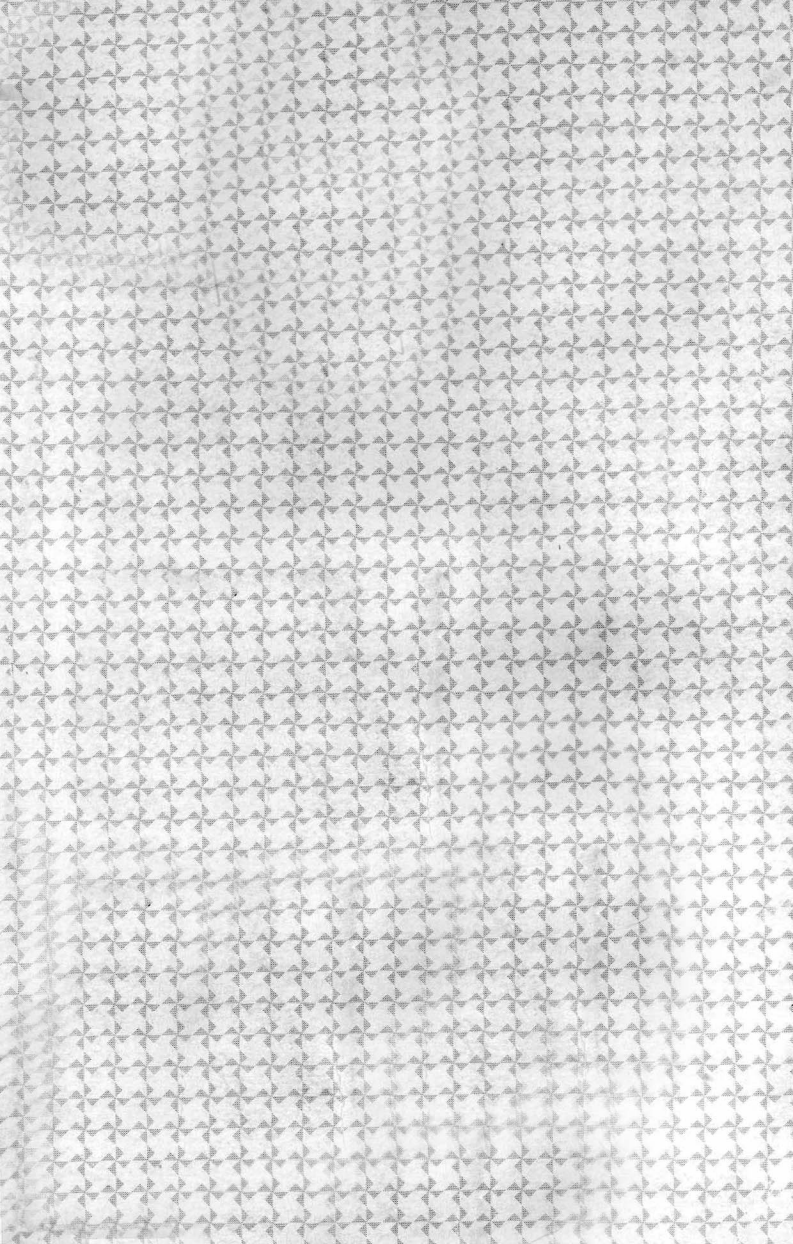
TEL 東京・03(215) 2211~2214 振替 東京43444番

○万一落丁、乱丁の場合は、返送次第本社でお取り替え致します。
○小社発行品切れの図書雑誌は近くの書店又は本社へご注文下さい。

長篇ポリティカルフィクション

暗黒潮流

黒木曜之助



暗 黑 潮 流

黑
木
曜
之
助

文華新書・小說選集

目次

スキャンダル	7
革新候補を倒せ	36
裏取り引きの金脈	51
毒をもつて毒を制す	69
マスコミは踊つた	93
謀略のジャングル	116
死者の口を割れ	146
濁流へ身を投げろ	171
罌を仕掛けろ	196
死者だけが損をする	219
悪い奴ほど得をする	240
悪徳よ永遠なれ	268

カバ―装幀／首藤 進

スキャンダル

1

神田神保町の古本屋街の裏通りは、群小出版社を主とした小さなビルが並んでいるが、その中でもひととき見すばらしいのが、貸事務所専門の新神田ビルである。

限定された狭い地所で可能な限りの効率を上げようという家主の意向を具現して、猫の額のような敷地にヨーカンの箱を立てたように、背ばかり伸びた近ごろの若者のように、なんともひよわでたよりなげな風情である。そのうえ終戦後間もなく建てたものらしく、かなりの風雪に耐え抜いてきた、というよりも痛めつけられたといったほうがふさわしい印象で、汚ないうえに氣息えんえんとして倒壊を待つおもむきだった。

速水啓二はいつものことだが、そのビルが見えてくるとなになしに気が滅入る。

朝からたそがれちゃしようがねえな——速水はビルの前で小さく苦笑し、くわえ煙草を器用に吹き飛ばしてから腕の時計を見た。九時五分すぎだった。間に合うようにきたつもりだったのに——。

「五分遅刻か」

速水は低くつぶやくと、長身をゆっくりと玄関へ運んだ。

このビルにはエレベーターがない。速水は狭く急な階段を登って最上階にたどりついた。階段の右側のドアになんとか芸能社、左手のドアになんとか会計事務所と書いてある。速水はそのどちらをも無視して屋上へ出た。

屋上には二つのプレハブ住宅が建っている。それも最近の本建築のものではなく、初期の仕様による造作で、壁面パネルのところに鉄棒が斜め十字にぶちがいになっている、飯場スタイルのバラックだった。

ただしドアにとりつけられたプレートだけはわりと新らしく、レリーフでこんな文字が刻みつけてある。

浜田興信所

人事調査専門

正確・迅速

ドアを開けると、所長の浜田良作はまだりようさくがデスクに脚を投げ出して、くわえ煙草で新聞を読んでいた。「七分遅刻やで」

浜田は広げた新聞から眼も上げず、関西弁を尻上りに投げてよこした。

速水は浜田のそばへ行き、黙ってデスクへ千円札を置いた。

「なんや？」

浜田はげんそうな視線を、千円札と速水の顔に往復させた。

「釣り銭三百円」

速水は浜田の顔の前へ掌をさし出した。

「こらおどろきや。あんさんほんまに罰金払うつもりんかいな？」

浜田がニヤニヤして見上げる。

「親しき仲にも礼儀あり。約束だからな」

これまで十時出勤だったのを、昨日なにかのはずみで一時間繰り上げることに決め、遅刻したら一分について百円の罰金を支払うことを申し合わせたのだった。

「わいは冗談のつもりでいったんやで。それにうすっぺらな財布して、なにも仲間うちで見栄張らんともええがな」

「ほな、そうさせてもらいまひよ」

速水もおどけて関西弁でいい、さっさと千円札をポケットに戻した。そして来客用のソファに腰を据えると、煙草に火をつけた。

狭い部屋だ。六畳サイズのプレハブ・ハウスだから、浜田のデスクと資料ファイル用のスチールキヤビネット、それに応接用の三点セットだけで、残された空間はほんのわずかしかない。プレハブ・ハウス自体もおんぼろだが、備品の家具も倒産会社の競売品だから、ハウスにつり合って古ぼけていた。

まったく速水の気を滅入らせる舞台装置だが、彼はこんな浜田興信所がきらいではなかった。積極的に好きという気持にはなりきれないが、目下のところ居心地はそれほど悪くはない。ただし財布の

ほうを除いてのはなしだが――。

浜田は短軀猪首で髪がうすく、どう見ても四十男の風貌だが、三十一歳の速水よりたった二つだけ兄貴でしかない。速水は長身で男前だから、ときとすると十歳も若く見られることもあり、それじゃまるっきり親子じゃないか、と浜田を嘆かせることになる。

興信所や探偵社の経営者に根っからそれを職業としている人間は少ないが、浜田もまた警察官という前歴を持っている。

浜田は関西のある県警本部に勤めていた。といって中央出向のエリートではないから、初めから本部詰だったわけではなく、地元採用警察官の一般的なコースに従って、第一線警察署の交番勤務巡査としてスタートした。そしていくつかの警察署勤務を経たあと、七年目に本部勤務となった。栄転である。このとき階級も警部補になっていた。万年平巡査で本部勤務の経験もないまま定年を迎える者が多い中で、浜田は無資格の一般警察官としては、それなりのエリート・コースに乗ったといえよう。もちろん無資格警察官では県警本部長の椅子は不可能だが、一線の警察署長あるいは本部の部課長の地位なら夢ではない。若い彼の前途は洋々としてひらけていたはずである。

ところがそんな浜田が警察官を**誅**になったのである。汚職であった。といってこの汚職はきわめてユニークであり、被害者をさておいて純粹に手口だけ考察すれば、少々不謹慎な表現だがユーモラスとすらいえた。

そのとき浜田は県警本部の防犯課にいたのだが、防犯課の所管事項のひとつに家出人の捜査がある。といっても事件は多く警察官の数は限られているから、受理した家出人捜索願のすべてについて捜査するわけにはいかない。犯罪にからむ疑いのあるものは捜査一課が担当し、それ以外のケースに

ついで県下及び全国の警察に手配し、また身元不明の死体などについてチェックするわけである。

明らかに自殺のおそれがあるというケースは緊急を要するから、タイミングを失わずに積極的な捜索の手続きがとられ、スピーディーな処理がなされるけれども、その他のケースについてはあまり積極的ではなく、警察といえども一般のお役所なみの官僚的な事務処理に留まってしまふ。

浜田はこうした警察の消極性に着目した。そして某大興信所の県支社へ、防犯課で受付ける家出人捜索願の届出人の住所氏名を、遂一流したのである。防犯課には県内のケースだけでなく、全国の県警から手配がきている。その興信所は全国の家出人の留守宅から、ダイレクトに調査依頼の契約をとることができた。いうなれば家出人専門のご用聞きである。「チワワ、家出人のご用はありませんか」と戸別訪問する光景は、ちょっとユーモラスでないことはない。

浜田はその興信所から一件につきなにがしかの謝礼をもらった。家族、興信所、浜田と三者それぞれに利益があり、そのままではめでたい成行のはずだった。

周知のように家出人捜索願には、公開と非公開がある。公開というのはマスコミなどにも発表し、ビラやチラシを配ったりして広く世間に知らせて、一般の協力を期待するもので、当然発見率は高い（といっても相対的な比較の問題だが）。これに対し非公開は警察オンリーによる秘匿捜査である。しかしながらその警察が前記のような事情だから、はかばかしい成果は望めない。

いずれにしても公開の場合は、家族が興信所に依頼したり、興信所のほうから注文とりにきても不思議はない。しかし非公開の場合、家族から依頼するときは別として、興信所がご用聞きにくるのはおかしい。しかもそれが一件や二件でなく、軒並みに必ずということになると、これはもう不自然なほどというよりも明らかな作偽が感じとれる。ライバルの興信所がこの点に不審を覚えて、お得意の調

査力を駆使して浜田の存在を突きとめ、非公式に県警本部に抗議したので、浜田は処分されたのである。

「これは人助けなんやでエ。警察官として警察が頼りにならんことを実感しとるさかいに、民間の調査機関を積極的に活用したんや。これはヒューマニズムの問題やで」

速水にそのいきさつを打ち明けたとき、浜田はまじめとも冗談ともつかぬ調子でぬけぬけとこういった。弁解というよりも明らかな詭弁だが、速水は一面の真実を感じると同時に、関西人らしい臆面のなさに、奇妙なおかしみを覚えたものだった。

速水は神田の小さな出版社の編集者だった。あるやもめの老いた著者が病気で入院したので、窮状を見かねた速水は社長に頼んで印税を前借してやった。ところがその著者はそのまま病院で死んだ。もちろん原稿は未完というよりも執筆を始めたばかりの段階だった。当然前借した印税の回収の見込みはない。そこで社長は印税分を速水の月給から差引かせてもらえまいかとい出したのである。

自分の家庭の生活費を社の経費でおとしている社長らしいケチぶりだった。速水はそのケチぶりにも腹がたったが、自分の能力が月給以上のものでないとレッテルをはられたようで、勤める意欲をなくしてしまった。速水としては前払いした印税ぐらい次の企画でとりもどせると思っていた失先だったからよけいである。

退社は独身の気楽さもあったとはいえ、浜田という飲み友だちの存在を意識しなければ、若い情熱と正義感だけではためらったにちがいない。

「お互い、ヤクザな商売に首をつっこんでいるさかいに、うまが合うかもあらへんで。所長とか調査

員とかいうことでなしに、共同経営者ということできまひよ。もっともカネのほうはあまり自信をもってはうけ合えんけど、食うだけぐらひは保証するさかい手伝ってえな。どや、速水はん？」

いつも飲み屋で顔を合わせると、浜田はこういつて速水を誘っていた。

速水はとりあえず浜田に厄介になるつもりになった。しかし新しい就職口を見つけるまでのつもりだった。浜田のお荷物になつてはいけな思っていた。

それなのにすでに一年が過ぎようとしていた。この間、他に勤め口が見つからなかったわけではない。元の出版社でも社長が代り、戻つてこないかと編集長の熱心な勧誘もあった。だが当面は動くつもりはなかった。

それほど快適な居心地というわけではないのだが、強いて理由づけを試みるならば、一種の惰性とも呼ぶべき種類のものかもしれない。それに気楽な自由業の湯に漬つてみると、たとえ高給をもらつても宮仕えはぞっとしない。そして速水自身が意識すると否とに拘わらず、見知らぬ他人の裏側を覗き込む私立探偵稼業が、彼の性に合っているらしい。

2

浜田はあいまいな笑いを浮かべて、デスクから立ってきた。そして速水と向かい合つてソファに腰をおろすと、新しい煙草に火をつけて、ゆっくりと煙を吐き出してから、

「早起きは三文の得やとかいうが、出勤を一時間繰り上げたら、てきめんにご利益があつたんや」

「ほう、どんな？」

「女性からの電話だつせ」

「依頼の？」

「もちろん」

「内容は？」

「電話ではいえないのや」

「そんなのはこれまでにもあったじゃないか。電話で予告しといて、あとから足を運ぶ」

「こんどはちゃうのや。こっそり外で会いたいいうねん。出てきてほしいいうのんや」

「何処へ？」

「帝都ホテルだっせ」

「帝都ホテルだって、ロビーなら喫茶店と変らんぜ」

「ロビーなんかあらへん。0246号室なんや」

「格別のことはないぜ。金さえ払えば誰だって泊まれるんだからな」

「そんなことわかつとるがな。わいがいうてるのはそんなことやあらへん」

「じゃあなんだ。ストレートにいつてほしいな。関東人は気が短いんだぜ。上方風のいい回しはじれなくなるよ」

いつもの速水の毒舌を、浜田はニヤニヤして受け流し、

「着手金として百万払うというんや」

「ほんまかいな？」

速水は思わず関西弁を口にしていた。

「もちろん必要経費の実費と規定の料金は、きちんと支払いますいうんや」

「なるほど」

「そればかりやないでえ。調査終了後に成功報酬のような意味合いで、改めてもう百万くれるいうんや」

「おどろくべき好条件だな」

「浜田興信所創立以来のケースやがな」

「空前絶後、古今未曾有、ほったつねりたくなる心境だぜ」

「これが大手とか中級以上の興信所に持ち込まれたんなら、まだなんとかわるで。よりによってんでわいんとこみたいなの、吹けば飛ぶような興信所に口をかけたんか——」

「そこで、ヤバイ仕事と推理したわけだな」

「とにかく、まともな調査依頼とは思えんやろ」

「で、どうなんだ。行くのか」

「依頼の内容を聞いてみることに、話にならんさかいにな。ひょっとして弱小興信所のコンプレックスか、あるいは意地汚ないわいの下司のかんぐりかもしれへんし——」

「なるほど」

「そこであんさん行っとくんはなれ」

「おれが？」速水は小さく笑った。「おいおい、所長はお前さんなんだぜ。こんなでかい仕事の契約には、当然所長が当るべきじゃないか」

「速水はん、あんさんも人が悪い」

「どうして？」